
廻る星々

希由華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
廻る星々

【Nコード】
N1899W

【作者名】
希由華

【あらすじ】
ーこれは、一人の女性を軸に廻る星々のお話。

星々の光、小さくきらめく光。この地球からは、ほんの一瞬にしか見えないのだろう。けれども、星は遠い遠いところから瞬く。それは、人間も同じではなからうか？一方に伝えたいがために、星・
・つかまり私達は輝くのだろう。たとえ、その相手がいなくなっても。思いや願いを叶えるために、己のために。だからこそ、人々は星に願いをたくすのだろうか。数十年、数百年の時を旅してきた

星々に。

願う星

――もしもだよ？神様なんていたらどうする？

――そんなもの居ない

――は夢がないなあ

――がバカなだけなんだろう？

――と星が見たいな

――はバカなんだね

――どうして、そういうの？

――だって、星はこうして見えているのに

――はバカだね

――がバカなんだろ

――には分からないよ

――はやっぱり、一緒には来れないんだね

さよなら、由紀

まって、――

「悠里……………」

凄く、すごく…………覚えてないけど憶えてる。それに寒気がする。これから嵐が来るような。これが始まりだなんて誰に想像が出来たのだろうか？

願う星（後書き）

恋愛なんぞした事もないアホの子が悲恋物に手を出すとどうなるか

朝

―朝の行い―

「おはよう、父さん、母さん」

いつもの朝の挨拶。けれども、その挨拶の返事は私が15の時からかえってこなくなった。おはよう、ただいま、おやすみ．．．普通の家庭ならかえってくるはずの返事。返事だけでこんなに心を少しずつ．．．少しずつ．．．暗い暗い谷底へと導く。でも慣れたものだ。朝は、朝の挨拶、支度、出発。あれから5年たったが、あまり変わらない。昼には、大学、勉強、バイト、夜には、明日の支度、報告。就寝。いたって普通。

「いってきます。父さん、母さん」

時間はいつも通りなので、遅刻はしない。ただ、サークル仲間と飲んでしまった時は早足になるくらいかな。滅多に飲まないけれど

「おっはー悠里、元気だったかい？我妻よ！！」

「ちよつとっ！？人前でやめてよ恥ずかしい．．．ほっ．．．ほら注目されてるし．．．」

「嫌だ！私達は愛し合ってるんだ！何が悪いっ！？．．．とまあ、少々意地をはりすぎたかな？悠里はまったく連絡しないんだから、心配で心配で．．．」

呆れ返ったように「志水 深木」は答える。

私の最愛のお友達。

毎朝毎朝、こつこつ【愛の告白】が無ければの話なんだけどね。

「悠里は夏の間何してたの？またバイト？サークルだったら私と会うし．．．あ、てか彼氏とか作りなよ〜心の支えになるよ。ヒモはダメよ、絶対ダメ」

「あはは．．．彼氏はまだ早いよ〜それに、今の生活が幸せ。お婿さんの深木の目が黒い内は無理そうだし」

私は苦笑いでそう答える。お母さんがまだ生きてたらこんな感じなのかな？まあ、深木は人一倍心配性なんだからっ．．．

「ありがとう」

「いえいえ、わたくしの娘なんですもの。孫．．．おい、何をしてるんだお節介馬鹿ビッチ」

「し．．．東雲くん．．．それは禁「誰がビッチですって!？」お節介と馬鹿は認めるわよ．．．だけど」

深木が深呼吸する。ダメかな．．．もう．．．。

「ビッチって何よっ!？まだわ「深木、大学いこ。東雲くん、大学で」

「まって、悠里!!私はまだ言いたりな．．．」

無理やり私の顔一個分の高さでスレンダーな体型の深木を引っぺがし、電車に乗り遅れないようにスタスタと歩きはじめる。さっきの男の子は、「東雲 千晃」

私達と同じ大学で、サークル・お星様観察倶楽部に所属している、深木ももちろんいっしょ。サークル名は、私が本来の名前を長すぎで覚えられないから、こんな可愛らしい名前になってしまった。サ

「クル全員も公認している。」

「ふんっ。どーせ、あいつ童貞なんですよ。．．．あ、大学一緒なのにどうして一緒に行こうって誘わなかったの？もしかして、嫉妬した？」

「ないない」

「あるある」

「ありませんっ！」

「あいさっ」

ふう、なぜか高校時代からついてしまった謎のやりとり。やらなかつたらやらなかったで、落ち込む、深木が。

「一緒に行こうって思ったけど、深木。朝から愛の告白を大衆の前で叫んで、おまけに処女と童貞宣言を聞かされるところだったわ。仲裁にはいる人の事も少しは考えて欲しいな」

「いたっ．．．こっ、心が痛い痛い．．．うう」

朝から付き合わされる身にもなってよね。なんて心の片隅で思い、胸元に手を当て苦しそうにする深木を見上げる。

「何さ、ふふっ」

「なんでもない。早くいこ？深木、単位ヤバイでしょ？ほらっ、早く早くっ」

グイグイと深木の腕をひっぱる。

ちよっただけ違うのは、

少しよろけて転びそうになったのと、電車に全力ダッシュをしないと間に合わなさそうだったことがあったかな？

まあ、何がともあれ私達は大学へ向かう。
今日の朝、終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1899w/>

廻る星々

2011年10月9日14時20分発行